

鳥取県米子市

ME GU MI
目久美遺跡

(第15次調査)

2009. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

例 言

1. 本報告書は、鳥取県が計画する3・4・20中尾大谷町線地方道路交付金事業に伴い、平成19年度に米子市日久美町で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、米子市教育委員会の管理・指導のもと、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 本報告書における方位は真北を示し、第5図に表記した座標値は日本測地系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書第3図の地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」（平成7年8月1日発行）を加筆して使用した。
5. 調査の実施に当たって、基準点測量を株式会社エースプランに、木製品の保存処理と樹種同定を徳島大学生物研究所に委託した。
6. 本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
7. 発掘調査によって作成された図面、写真、出土遺物は、米子市教育委員会によって保管されている。
8. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。(敬称略)
大賀克彦、小口英一郎、高橋章司、西尾克己、濱田竜彦、深田浩

凡 例

1. 発掘調査時において使用した遺構名と番号は、報告書作成時に変更している。
2. 遺跡の略称は「ME-15」である。
3. 本報告書における遺物番号は次のように記す。
Po：土器、土製品、陶磁器 S：石製品 W：木製品 B：銅製品
4. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器が4分の1、土錘（Po.50・51）が2分の1、石器が1分の1、木製品が4分の1である。

目 次

例言、凡例

目次

第一章 経過

第一節 調査の経過	1
第二節 発掘調査の経過	1
第三節 整理作業の経過	1
第四節 調査体制	2

第二章 遺跡の位置と環境

第一節 地理的環境	3
第二節 歴史的環境	3

第三章 発掘調査の方法と成果

第一節 調査の方法	7
第二節 遺跡の層序	8
第三節 縄紋時代前期～後期の調査	9
第四節 弥生時代前期の調査	13
第五節 弥生時代中期の調査	14
第六節 弥生時代後期の調査	19
第七節 古代から近世の調査	22
第八節 遺構に伴わない遺物	22

第四章 自然科学分析

第一節 口久美遺跡出土木材の樹種同定	24
--------------------	----

第五章 総括

第一節 縄紋時代の調査	25
第二節 弥生時代の調査	26
第三節 まとめ	26

写真図版

報告書抄録・要約

第一章 経過

第一節 調査の経過

本発掘調査は、鳥取県が進める3・4・20車尾大谷町線地方道路交付金事業を原因とする、鳥取県米子市目久美町地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

この3・4・20車尾大谷町線の道路工事については、これまでに路線上に位置する遺跡の取り扱いについて、関係機関で協議され、平成7年度より長砂第3遺跡、長砂第4遺跡、目久美遺跡第5次、6次、8次、9次、10次、12次、13次、14次調査の各事業が財団法人米子市教育文化事業団により実施されている。

今回、発掘調査を実施した第15次調査地点は、平成17年（2005年）に調査が実施された第12次調査地点の西側に隣接していることから、事前に遺跡の存在が予測されていた。このため、米子市教育委員会の指導により、鳥取県が文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が文化財保護法第92条第1項に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出し、発掘調査を実施することとなった。

第二節 発掘調査の経過

発掘調査は、工事対象区間の200㎡を対象とした。

現地調査は、平成20年2月5日より開始し、平成20年3月31日に終了した。調査期間中は、休憩用の仮設ハウスやトイレを設置し、安全・衛生面に配慮した。

現地調査は、鋼矢板の設置工事が終了した後に、重機により表十層を掘削してから、H鋼による補強工事を実施した。また、調査で排出された土砂は重機にて回収し、隣接地に保管した。包含層の掘削作業、遺構検出作業は全て人力で行い、検出した遺構の測量、写真撮影などは、全て調査員が行った。

第三節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成19年度（2007年度）は、現地の調査と並行して、一部の遺物の洗浄作業を行った。平成20年度（2008年度）は、出土遺物の実測、拓本、トレース作業を進めた。報告書の作成は、遺構図面のトレース、遺物の写真撮影などを調査員が行い、平成21年3月に報告書を刊行した。

第四節 調査体制

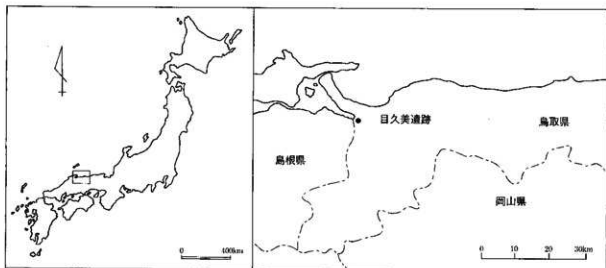
平成19年度（2007年度）

事業主体	財団法人	米子市教育文化事業団
理事長	小林	道正（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）
埋蔵文化財調査室		
室長	長谷川	明洋（米子市教育委員会文化課長）
統括調査員	平木	裕子
非常勤職員	田中	呂子
事業担当	主任調査員	佐伯純也
	嘱託職員	
	（調査補助員）	森田静香

平成20年度（2008年度）

事業主体	財団法人	米子市教育文化事業団
理事長	杉原	弘一郎
事務局長	中村	智至
埋蔵文化財調査室		
室長	長谷川	明洋（米子市教育委員会文化課長）
統括調査員	平木	裕子
非常勤職員	田中	呂子
事業担当	主任調査員	佐伯純也

調査協力・指導・助言・調整・管理 米子市教育委員会



第1図 鳥取県の位置図

第2図 目久美遺跡の位置図

第二章 遺跡の位置と環境

第一節 地理的環境

目久美遺跡は、鳥取県米子市目久美町に所在する、縄紋時代から近世の複合遺跡である。米子市は、総面積132.21平方キロメートル、人口約15万人を有する鳥取県西部地方の中核都市であり、古代の行政区分では、伯耆国会見郡、汗入郡に属する地域であった。地形的には、米子市の東南側に位置する大山（標高1,729m）の造山活動によって形成された火山灰台地と、市の中心を北流する日野川の沖積作用によって形成された米子平野部と弓ヶ浜半島部に大別される。

遺跡は、JR米子駅の東南約500mの地点に位置し、遺跡の南側に位置する行者山（標高128m）から伸びる丘陵裾部一帯に展開しているものと考えられる。現在の目久美遺跡周辺は、昭和8年に開削された新加茂川や、加茂川放水路、国道180号線などが建設され、市街化の進んだ環境となっている。

第二節 歴史的環境

旧石器、縄紋時代

目久美遺跡において、人類の生活痕跡が認められるのが縄紋時代早期末以降と推定されている。縄紋海進期には、この目久美遺跡も海に面した集落だったらしく、第1次調査で出土した多量の石鏃や石鏃、動物遺体などから、縄紋時代の目久美遺跡周辺は、豊かな自然資源に恵まれた環境に位置していたことが推察される。

旧石器時代の資料は、諏訪西山ノ後遺跡（34）において、ローム層からナイフ形石器が出土し、後期旧石器時代にまで遡る遺跡の存在が確認されている。また大山山麓の原畑遺跡や泉中峰遺跡からは、ナイフ形石器が採集されており、少しずつではあるが旧石器時代の様相が明らかとなってきている。また、尖頭器が奈良遺跡（15）や陰田第6遺跡（18）、橋本徳道西遺跡（24）などで出土しており、狩猟生活の痕跡を窺うことができる。縄紋時代早期には、大山の西麓、標高75m付近の微高地上に位置する上福万遺跡や、泉中峰遺跡、新山山田遺跡（20）で押型紋土器が確認されており、これらが米子市内最古の土器を持つ集落と考えられる。前期の遺跡は、目久美遺跡のほか、陰田第9遺跡（16）、古谷銭神遺跡（22）、鮎ヶ口遺跡、中期には目久美遺跡、陰田第7遺跡（17）、後期には目久美遺跡、古市河原田遺跡（21）、河原田遺跡があり、これらの遺跡からは土器や石器などの遺物が出土している。縄紋時代の遺構に関する資料は、落し穴状の土坑以外は数が少なく、配石・集石遺構、貯蔵穴などが見つかったに過ぎない。縄紋時代の住居跡については、明確な時期がはっきりしないものの、平地式住居と見られる遺構が岡成第9遺跡で確認されているほか、泉中峰遺跡から周囲に小ピットが巡る竅穴が見つかっており、形態的な特徴から住居跡の可能性が指摘されている。

弥生時代

縄紋時代晩期から弥生時代前期には、海退によって生じた低湿地を利用した農耕が行われていたらしく、目久美遺跡をはじめとして長砂第4遺跡などの低湿地遺跡で、弥生時代前期の粘土層から、プラントオパールを検出例が見られる。また、この頃から平野部に立地する遺跡の数が増加しており、集落の選地にあたって、低湿地に隣接する地点が好んで選ばれたためと考えられる。弥生時代中期前

葉段階の資料は、日久美遺跡、長砂第1遺跡(8)など少数の遺跡で見られる。中期中葉から後葉にかけては、集落の規模が拡大する一方で、荻木晩田遺跡や陰田第6遺跡(18)、青木遺跡(14)のように丘陵部に集落を形成する動きが見られる。後期には日野川右岸の尾高浅山遺跡、日下寺山遺跡のような丘陵に障壁を巡らす遺跡が出現し、政治的な緊張状態のあったことが推察される。

日久美遺跡で本格的な水田が形成されるのが弥生時代中期以降である。第1次調査では、3時期にわたって耕作された水田が確認されたほか、木製農耕具、石包丁、石鎌などの遺物が出土している。しかしながら、後期に入ると遺物の出土量は減少し、水田も放棄される。第6次調査では、弥生時代中期末までに堆積した洪水砂層と、その層を掘込んだ幅6m、深さ3mの水路が検出されており、その水路も再び洪水砂で埋もれている状況が確認されている。また日久美遺跡の東側に隣接する池ノ内遺跡(2)では、弥生時代後期から水田の耕作が始まっており、耕作地が日久美遺跡から池ノ内遺跡へ移動しているものと考えられる。このように、弥生時代後期初頭段階の日久美遺跡周辺において、洪水を伴う大規模な自然災害が起り、集落の移動を余儀なくされたことが窺え、陰山第6遺跡(18)などの中期集落の多くが丘陵部に立地している事実とも関連があるものと推定されている。

古墳時代以降

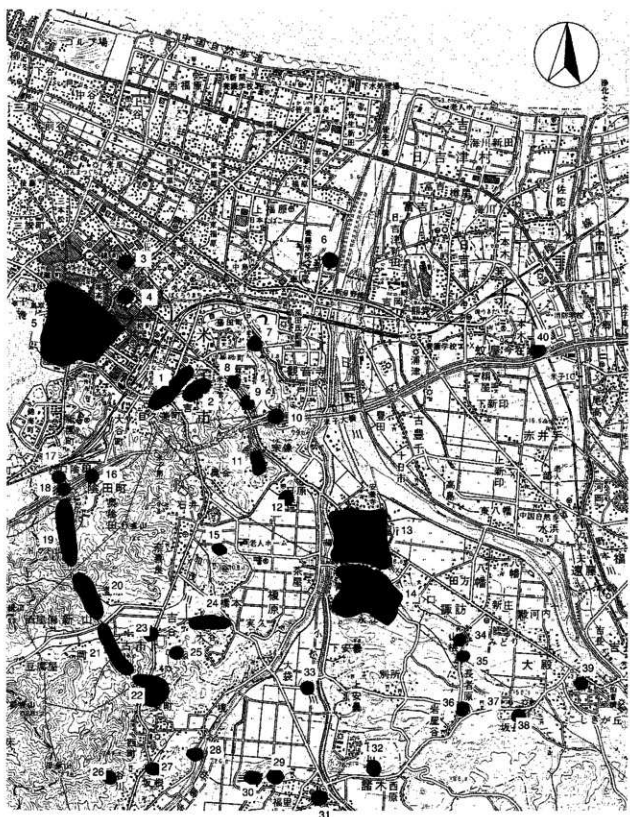
日久美遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての遺物は少量ながらも出土しており、近隣に該期の遺跡が存在するものと考えられる。また第10次調査では、古墳時代前期のものと考えられる水田が見つかっている。

古代には、日久美遺跡のある米子平野西部は、和名抄に記載のある「会見郡半生郷」に属する地域と考えられている。ただし、これまでに半生郷の存在を裏付ける直接的な資料は得られておらず、その範囲については不明である。日久美遺跡では、第5次調査で墨書土器が出土しているほか木簡、人形などが見つかっており、近隣に奈良・平安時代の施設が存在しているものと考えられる。また、平安時代後期段階の資料はあまり見つかっておらず、遺跡としての連続性がつかみにくい状況である。

中世の様相は、西伯耆に関連する文献が少なく、不明な部分が多いが、尾高城跡の調査で鎌倉時代の在地領主の屋敷と見られる遺構が見つかっている。室町時代には、伯耆国守護の山名氏一族がこの地を代々支配していたが、応仁の乱以降の戦火は山陰にも飛び火しており、大永4年には出雲の尼子氏が西伯耆に侵入し、さらなる混乱が続いた。16世紀末に至って、古川広家が西伯耆の領主として湊山に米子城(5)の築城を始めるが、朝鮮出兵や人取の陣など、社会的に不安定な状況が続いていたことから、築城は中々進展しなかったようである。

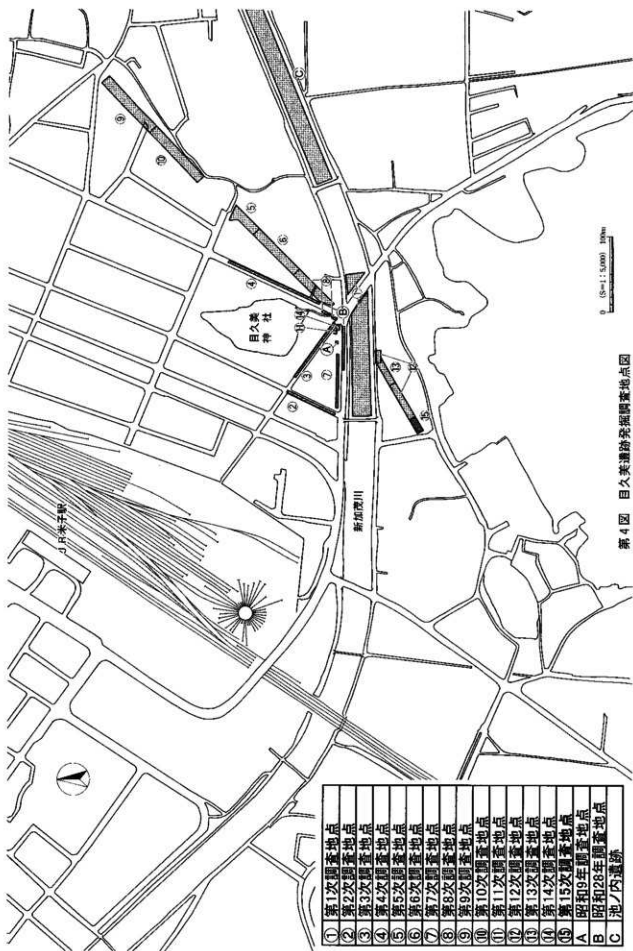
近世には、1600年(慶長5年)に中村一忠が西伯耆の領主となり、この地を支配したが、1610年(慶長15年)から加藤貞泰、池田出之へと国替が続いた後、1632年(寛永9年)に鳥取藩主となった池田光仲の家臣荒尾氏が米子城預かりとなり、以後明治維新まで荒尾氏によって統治された。また、18世紀以降は米子城郭内の空屋敷や海浜部の砂丘地が新田開発され、農業生産の基盤が整備された。長砂から日久美にかけての地域も、地元の豪商、大寺屋による新田開発が行われ、整然とした水田風景が広がっていたものと考えられる。

近代には、魔落置巢により、鳥取県が設置されたものの、1876年(明治9年)には鳥根県と合併され、1881年(明治14年)に再び鳥取県が再設置された。



- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|--------------|
| 1 目久美遺跡 | 9 長砂第2遺跡 | 17 稲田第7遺跡 | 25 吉谷トツ遺跡 | 33 大隈丸山遺跡 |
| 2 池ノ内遺跡 | 10 夏宮古墳群 | 18 松田茶臼遺跡 | 26 清水谷遺跡 | 34 諏訪野山ノ原遺跡 |
| 3 稲野第1遺跡 | 11 宗像古墳群 | 19 松田遺跡群 | 27 石巻跡遺跡 | 35 諏訪野山ノ原遺跡 |
| 4 角野町遺跡 | 12 日原6号墳 | 20 粟津遺跡群 | 28 早足遺跡 | 36 長者屋敷遺跡 |
| 5 米子城跡 | 13 稲市遺跡 | 21 古市遺跡群 | 29 宮尾遺跡 | 37 新長下殿敷遺跡 |
| 6 専尾西浜中遺跡 | 14 青木遺跡 | 22 吉谷遺跡群 | 30 三峰殿山遺跡 | 38 坂中庚寺 |
| 7 長砂第3遺跡 | 15 藤島長遺跡 | 23 宮谷上原山遺跡 | 31 天方遺跡 | 39 大寺遺跡 |
| 8 長砂第1遺跡 | 16 藤田第9遺跡 | 24 熊本遺跡群 | 32 熊木遺跡 | 40 寺在東下井ノ上遺跡 |

第3図 目久美遺跡周辺の遺跡分布図



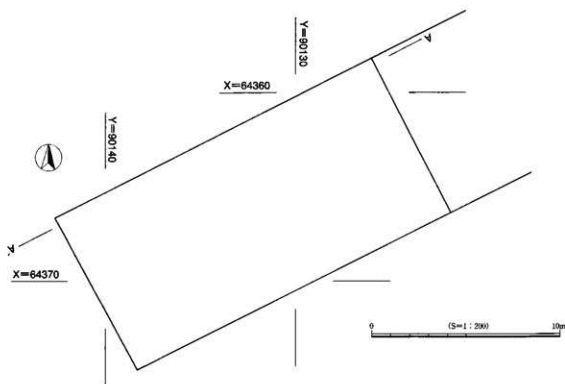
第4図 目久美遺跡発掘調査地点図

第三章 発掘調査の方法と成果

第一節 調査の方法

現地調査は、調査区内に鋼矢板を打ち込み、鋼鉄梁を設置して安全性を確保した。発掘調査では、宅地部分の盛上や、現代の水田耕作土を重機にて掘削したのち、人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は、一輪車を使用して、重機により調査区外へ排出した。

検出した遺構、遺物の記録には平板とトータルステーションを用い、座標値を記録した。写真撮影は、現地では35mmの一眼レフカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。またサブカメラとしてカラーフィルム、デジタルカメラも併用した。遺物撮影は、4×5版のカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。また、X線撮影については、島根県立古代出雲歴史博物館の御厚意により、館所有のX線撮影装置を借用して撮影した。

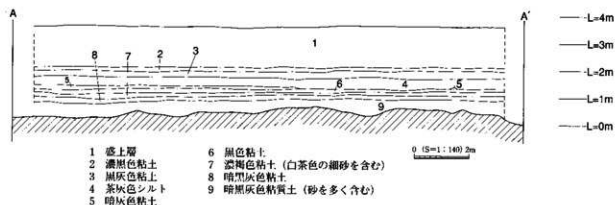


第5図 調査地点座標図

第二節 遺跡の層序

日久美遺跡は、標高2m程の水田地帯に位置している。調査地の現況は宅地である。調査地は、標高4mから0mまでの深度があり、大きく分けて9層に分層することが可能である。以下、主要な堆積層の特徴を述べる。

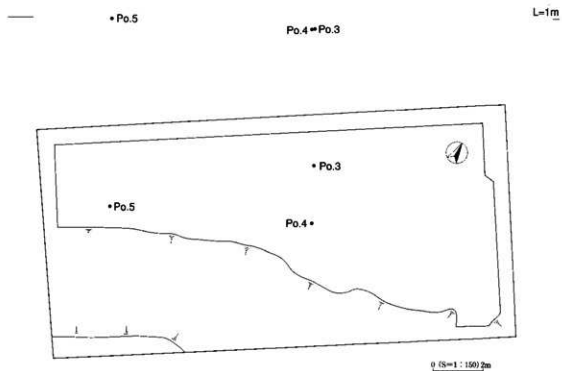
- (1層) 現代の造成土である。
- (2層) 近現代の水田上である。
- (3層) 古代～近代の遺物包含層である。
- (4層) 細砂が縞状に堆積する洪水堆積層。
- (5層) 弥生時代中期の水田土。
- (6層) 弥生時代前期から中期の遺物包含層である。
- (7層) 腐植を含む粘土層。
- (8層) 縄紋時代後期の遺物を含む。粘性が高い。
- (9層) 縄紋時代前期の遺物を含む。砂質上。



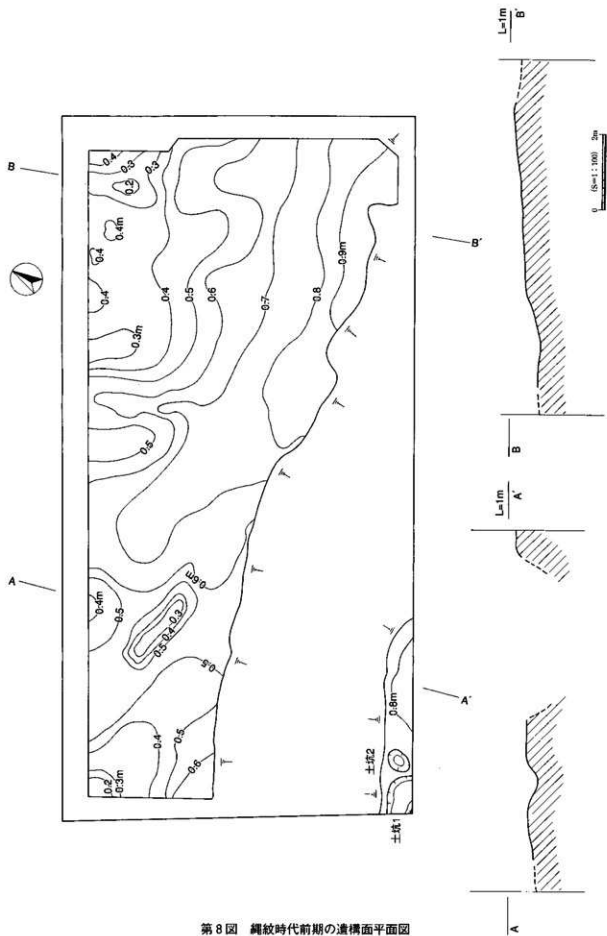
第6図 調査区断面図

第三節 縄紋時代前期～後期の調査

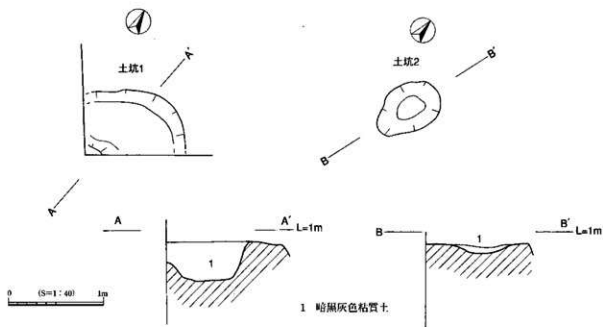
縄紋時代の堆積層は、8層と9層が相当し、いずれも縄紋海進期以降に形成された海成堆積層と考えられる。9層は30cm～60cm程度、8層は地形に沿っておよそ20cm程度の厚さでフラットに堆積しており、ほぼ水平な堆積状況を示す。有機質の遺物は、9層ではフナクイムシの生痕が残る流木が数点検出されたが、8層中からはあまり出土せず、堆積環境の違いを示している。また、動物骨や魚骨は出土しなかった。土質は、9層は暗黒灰色の粘質土で、砂を多く含み砂質傾向が強いが、8層は暗黒灰色の粘土で、9層と比較すると砂をあまり含まず粘性が高い。こうした違いが生じた原因は、縄紋海進の後退期において、河口部に程近い海岸環境から干潟のような湿地環境へ変化したためと考えられる。



第7図 第8層遺物出土地点図



第8図 縄紋時代前期の遺構面平面図



第9図 土坑1・2遺構図

検出遺構

検出した遺構は、縄紋時代前期頃の縄紋海進時に形成されたと考えられる海岸地形と、調査区の南西部で十坑状の窪みを2基検出した。

土坑1 遺構の両端部が調査区外に伸びているため、全容が判明しないが、長径120cm以上、短径80cm、深さ40cmの楕円形十坑と推定される。遺構内からの出土遺物は無く、時期は不明であるが、8層上面では検出できなかったことから、8層が堆積する縄紋時代後期以前には、すでに存在していたものと考えられる。遺構の性格については不明であるが、第1次調査では標高1.5m程度の微高地上に位置する縄紋時代中期の貯蔵穴が多数検出されており、その事例と比較すると、本遺構も標高1m程度の位置にあり、貯蔵穴としての機能を推定することも不可能ではないと思われる。

土坑2 長径75cm、短径50cm、深さ10cmの、水溜り状の不整形十坑である。人為的に掘削された遺構かどうかは分からなかった。遺構内からの出土遺物は無く、この遺構が埋没した時期は不明である。

海岸地形 一部を弥生時代の水路によって削平されているが、標高1mから標高0mにかけて、北に向かって緩やかに傾斜した地形である。所々にノッチ上に隆起した地点や、十坑状の窪みが見られるが、人為的な遺構は確認できなかった。岩盤は、灰白色の粘土が主体で、表面には甲殻類などによる生痕が残されている。隣接地の第12次調査地点では、この岩盤直上から多数の上器や石器類が出土したが、今回の調査区では土器の破片が少量出土したのみである。

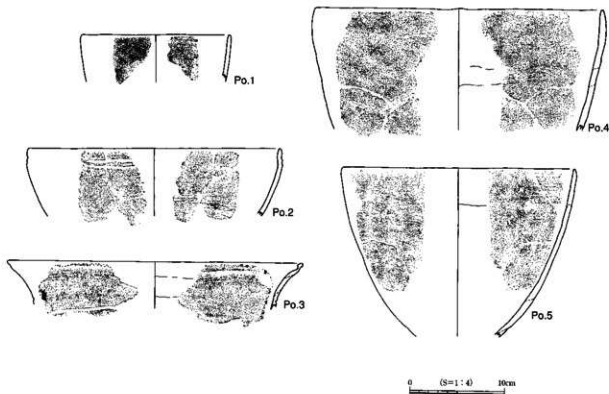
遺物出土状況

遺物は、堆積層中から細片化した土器片が少量出土しているが、まとまった出土状況は見出せなかった。出土量も少なく、縄紋時代前期の遺物分布は隣接地の第12次調査地点と比較すると、かなり希薄になっている。一方、縄紋時代後期の遺物は、8層中から出土しており、第12次調査での分布状況と似た傾向を示す。いずれの遺物も、包含層中から破片が出ているが、出土状況に特徴は見られず、破棄された土器がそのまま干潟状の湿地に埋没したものと考えられる。

出土遺物

検出した遺物は、全て土器片である。Po.1は深鉢の口縁部片で、内外面ともナデによる調整が施されている。Po.2は口縁端に2条の凹線が巡る深鉢で、復元口径は26.5cm程度と推察される。Po.3は口縁端部内面を玉縁状に肥厚させる深鉢で、頸部にも1条の凹線が巡る。Po.4は復元口径が30cm程度と推定される粗製の深鉢で、表面に粗いケズリの痕跡が残る。Po.5も粗製の深鉢であるが、体部にケズリ調整時の線条痕が明瞭に残る。

遺物の年代は、出土した層位からPo.1が縄紋時代前期に、Po.2～Po.5が縄紋時代後期に属するものと考えた。その中でも、粗製土器であるPo.4とPo.5は年代的な位置付けが難しいが、Po.2とPo.3は、元住古山式期の特徴を有しており、縄紋時代後期後半段階に属するものと考えられる。



第10図 第8・9層出土遺物図

第四節 弥生時代前期の調査

弥生時代前期の調査は、6層の黒色粘土層において実施した。この層は、既往の調査で縄紋時代晩期から弥生時代前期の遺物包含層であることが判明しており、この目久美遺跡一帯の広い範囲に堆積している。第1次調査や第12次調査では、この黒色粘土層の上層で足跡が多数確認されており、プラントオパールが高濃度で検出されている事案からも、弥生時代前期水田の存在が確実視されている。今回の調査では、北西部が弥生時代中期後半頃の水田の耕作土となっていたため、弥生時代中期後半の段階で攪乱されているものと考えられる。

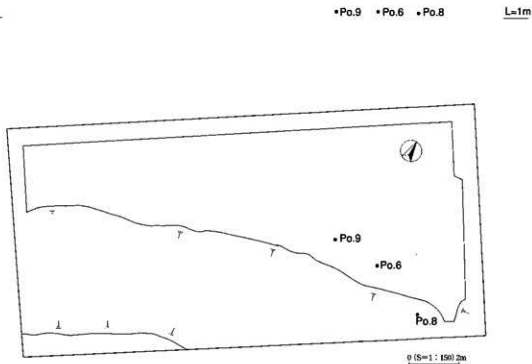
遺物出土状況

遺物は、黒色粘土層の掘削中に出土したものである。上層は上層の弥生時代中期水田の耕作によるためか、細片化しているものが多く、弥生時代前期から中期後半のものを含んでいる。遺物に年代幅があるが、上層水田の耕作途中に混入したものと考えられる。

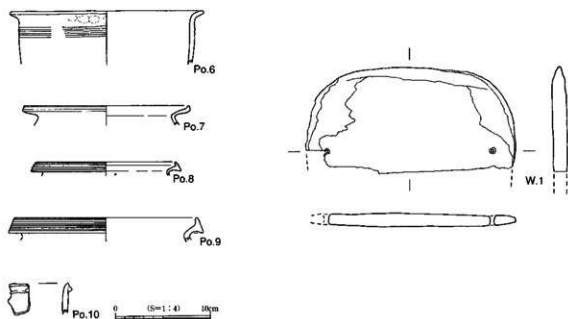
出土遺物

出土遺物は、土器と木製品である。年代的には、弥生時代前期から中期後半頃までのものが含まれている。

Po. 6は復元口径が20.3cmの甕で、口縁部直下に3条の凹線が巡る。Po. 7は口縁部が「く」の字形に屈曲する甕で、口縁部はやや肥厚する。弥生時代中期中葉頃のものと考えられる。Po. 8は口縁部に3条の凹線が巡る甕の口縁部片で、復元口径は14.7cmである。Po. 9は口縁部が「T」字状に拡張する甕の口縁部で、5条の凹線が巡る。Po. 10は突帯紋系土器の破片で、口縁部からやや下がった位置に突帯を貼り付けている。W. 1はスギを加工した楕円形の板材で、両端部を穿孔する。木製容器の蓋などの用途が考えられる。



第11図 第6層遺物出土地点図



第12図 第6層出土遺物図

第五節 弥生時代中期の調査

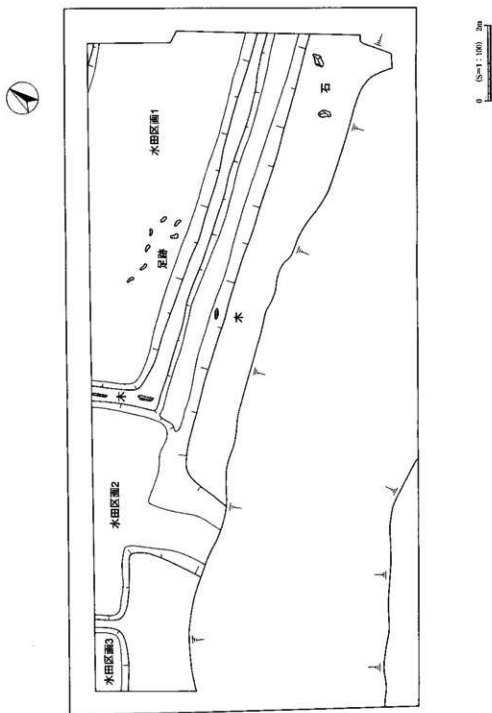
弥生時代中期の調査では、水田を確認した。隣接地の12次調査でも同様の水田を確認しており、今回の水田と一連の遺構と考えられる。水田の年代については、水田面から直接年代を示す遺物は出土しなかったが、隣接地の調査結果や下層の出土遺物から、弥生時代中期後半頃に耕作されていたものと考えられ、弥生時代後期初頭頃に起こった洪水により埋没し、耕作放棄されたものと推定される。

検出遺構

水田 水田は、第5層の暗灰色粘土を耕作土とするもので、第4層の茶灰色シルトによって被覆されていた。このため、このシルト層を少しずつ水平に掘り下げて畦畔の広がりを確認し、3区画分の水田を検出することができた。水田は、調査区の南側を弥生時代後期の水路1によって破壊されているが、北半部において東西方向に伸びる畦畔と、水田面に残された足跡を検出した。東西方向に伸びる畦畔は、長さ11m、幅50cm、高さ10cm程度で、カマボコ形の断面形をしている。調査区を東西に横切るように伸び、調査区の中央で北に向かって折れ曲がる。南北方向に伸びる畦畔は、2条検出したが、水田区画1の西側の畦畔は検出した段階ですでに大半が流出しており、畦畔を支える芯として埋められていた木片が露出している状況であった。水田区画1の南側には幅30cm、深さ5cm程の水路状の窪みがあり、南側にあった水田との境を流れる水路であると考えられる。水田区画2は、水路から10cm程下がったレベルにあり、一旦集められた水を湛える区画であった可能性も考えられる。また、東側の水田区画2と3では、耕作土である第5層が消滅しており、下層の第6層を耕作土として利用している。この原因は、本調査地が山に近接しているため、堆積土量が他の地点に比べて少ないことが原因と考えられる。人間の足跡は、水田面の全面において踏み込まれたような窪みが多く見つかったが、保存状態が悪く、完全な足型を残すものは少なかった。唯一、水田区画1の上面において、歩行状況が確認できる足跡が残されていた。



第13図 弥生時代中期の水田コンター図



第14図 弥生時代中期の水田平面図

弥生時代中期水田の水利に関しては、調査区の南側半分が弥生時代後期の水路で破壊されていることと、水田の大半が調査区外に延びているため、水田の広がり全体の全容がつかめないが、第12次調査では、弥生時代中期の河川と、水田に水を供給する水路を検出しており、本調査区の南側を流れていたものと考えられる。この地点では、弥生時代後期の水路1によって大半の遺構が削平されているが、弥生時代中期の水路も、弥生時代後期の水路1とほぼ同じ地点を流れていた可能性が高いものと考えられる。

水田区画の面積は、大半の水田が調査区外に広がっているため不明であるが、水田区画1は、東部の畦畔を12次調査で検出しており、長辺12m、短辺4mの小区画水田と考えられる。水田面からは、年代を示す遺物は出土していないが、水田下層の第6層から出土した遺物(Po.9)から、弥生時代中期後半頃のものと考えられる。

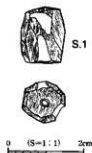
杭列 杭列は、長さ30cmから60cm程度の枝や板材を利用して打ち込まれたもので、上層で検出した水路1にほぼ沿う形で分布しており、水路1の構築に伴い打ち込まれたものと考えられる。全部で48本検出できたが、上層の第4層の掘削途中にも、倒れた木片が多数出土していることから、もう少し密に分布していたものと考えられる。また、杭列の一部には、横木を沿えた部分もあることから、洪水によって水路1が崩壊するのを防ぐ目的があったものと考えられる。

遺物出土状況

出土遺物は、この水田面を被覆する第4層から、管玉の未製品が1点のみ単独で出土した。この第4層は、これまでの調査でも広い範囲で確認されており、弥生時代後期初頭頃に堆積した洪水堆積層と考えられている。既往の調査では、この洪水堆積層から、多数の遺物が出土しているが、今回の調査地点では、この管玉未製品以外の遺物は出土しなかった。

出土遺物

S.1は碧玉製の管玉未製品である。長さ1.5cm、直径1.2cm、重量2.3gで、孔の直径は2mmである。X線撮影の画像を見ると、両面から穿孔されているが、穿孔具に鉄製針が使用されたのかどうかは不明である。表面の一部を欠損しているが、全面に線状の磨り痕が残る。年代的には、出土した層位から弥生時代後期初頭以前のものと考えられる。



第15図 第4層出土遺物図

第六節 弥生時代後期の調査

弥生時代後期の遺構は、4層上面で、弥生時代中期の水田を被覆する洪水堆積層である4層を掘りこんで造られた水路と土坑を検出した。水路の岸部に、ヤナギ属の立木の根株部分が残っていたが、上面は腐植が著しく、斧などの工具で加工されたような痕跡は残っていないかった。

検出遺構

水路1 検出した長さ18m、幅6m、深さ1.5mの水路である。水路の断面形は、逆台形に近いが、西側の岸部は、ややオーバーハンクしている。堆積上は、ほぼ白茶色の粗砂で占められており、短期間の洪水によって埋没したものと考えられる。隣接地の第12次調査で検出された水路とは、調査区の南西部で接続するが、先述したように木が生えており、今回検出した水路1とは屈曲するように接続していた可能性が高い。

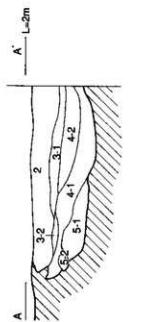
土坑3 長径70cm、短径60cm、深さ20cmの楕円形土坑である。埋土中から遺物は出土せず、時期は不明であるが、弥生時代後期以降に掘削されたものと考えられる。

遺物出土状況

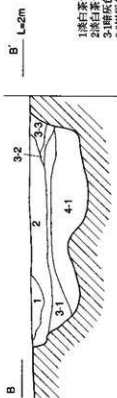
遺物は、水路の埋土中から土器が出土した。遺物の表面は摩滅したものが多く、水路内の水によって流されてきた状況を示している。

出土遺物

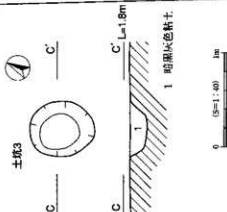
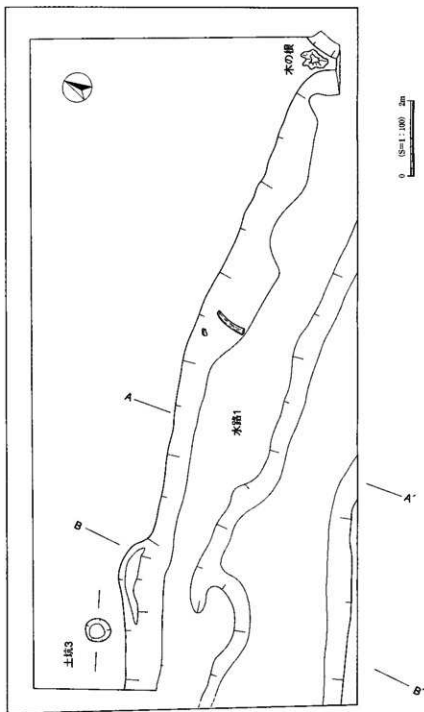
Po.11は、縄紋土器の深鉢である。器壁の風化が著しく、調整などは読み取れないが、胎上には微細な石英粒を含む。Po.12は、縄紋土器深鉢の体部片である。2連の「D」字状刺突紋が3条巡る。Po.13は縄紋土器の浅鉢と考えられる土器片で、外面には条痕調整後にナデを施した痕跡が残る。Po.14は突帯紋土器で、口縁端部に突帯を貼り付ける。Po.15～Po.23は、弥生土器の壺である。Po.15、Po.16は共に口縁が外反する壺で、Po.15は頸部に1条の凹線が、Po.16は頸部に2条の凹線が巡る。Po.17は口縁端部が水平方向に伸びる壺で、口縁端部に刺突を施す。Po.18、Po.19も水平方向に口縁部が伸びるが、端部は直立し、刺突による紋様を施す。Po.20はラッパ状に広がる口縁で、頸部に指頭圧痕貼付突帯が巡る。Po.21も同様の器形で、口縁端部は「T」字形に拡張し、端部に2条の凹線が巡る。Po.22は口縁部が内凹気味に拡張する壺で、頸部に1条の凹線が巡る。Po.23は上方に拡張した口縁端部が内凹する壺で、端部に5条の凹線が巡る。Po.24～Po.29は弥生土器の甕で、前期から中期後半までの遺物を含む。Po.24は口縁部が「く」の字に伸びるもので、口縁端部には刺突が施される。Po.25、Po.26も同様の器形だが、刺突は施されない。Po.27は口縁部直下に凹線紋が施される小形の甕で、口縁部と体部に刺突が施される。Po.28は口縁部に斜格子紋を施し、ボタン状の突起を施す。頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。Po.29は口縁部が「T」字状に拡張する甕で、口縁端部に3条の凹線を施す。Po.30は高坏の脚端部と見られる破片で、脚部径は21.7cmである。Po.31は弥生土器の高坏脚柱部で、表面の風化が著しいが、凹線紋の痕跡が読み取れる。Po.32は土器片の中央に孔をあけたもので、土器片を転用した紡錘車と考えられる。Po.33も中央に穿孔途中の窪みが見られる土器片で、製作途中で破棄された転用紡錘車と考えられる。Po.34、Po.35は、球状の上錘で、Po.35は半分が欠損している。Po.36～Po.43は弥生土器の底部で、全て平底である。



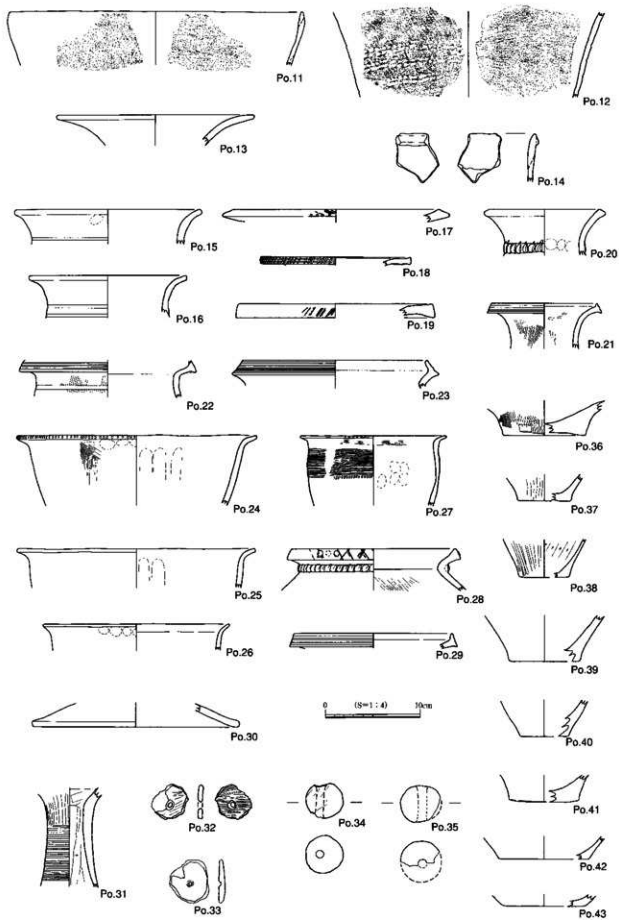
- 4-1 灰色粗砂
- 4-2 黒灰色粗砂
- 5-1 白色粗砂
- 5-2 黒灰色粗砂



- 1 淡白茶色粗砂
- 2 淡白茶色粗砂
- 3-1 暗灰色粘土
- 3-2 暗灰色粘土
- 3-3 暗灰色粘土



第16図 水路1・土坑3遺構図



第17図 水路1出土遺物図

第七節 古代から近世の調査

古代から中世の調査では、顕著な遺構は確認できなかった。これまでの調査でも、検出された遺構の数は少なく、古代から中世にかけては、水田耕作地として利用されていたからではないかと考えられる。

遺物出土状況

出土した遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、木製品である。いずれの遺物も遺構に伴うものは無く、包含層中を掘削中に検出したものである。

出土遺物

2層から3層にかけての堆積土中から、土師器や須恵器、陶磁器などが出土している。

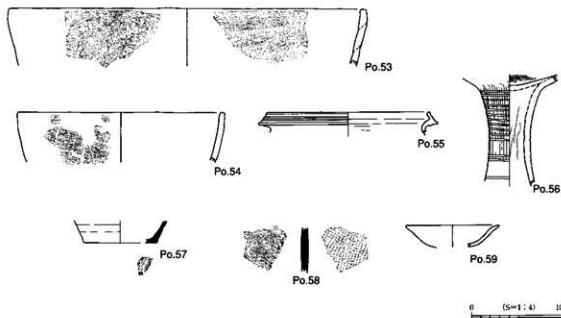
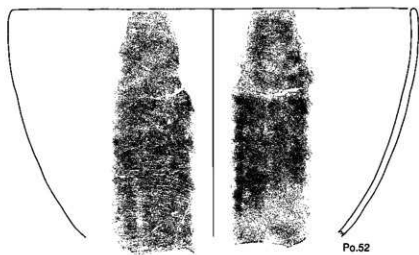
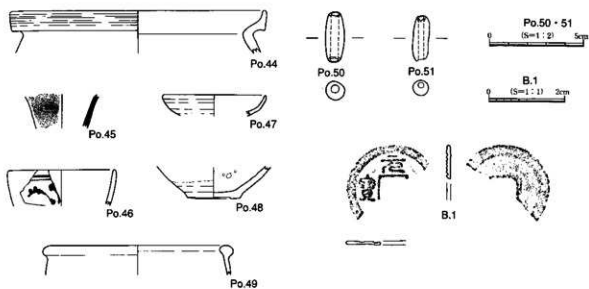
Po.44は弥生土器の甕で、後期前半頃のものと考えられる。Po.45は須恵器の壺か甕の頸部と考えられる破片で、波状紋が施される。Po.46は陶胎染付の碗で、肥前産と見られる。Po.47は緑色釉の陶器皿で、唐津系の製品と見られる。Po.48はざっくりとした灰色の胎土で、内外面に緑色釉がかかる。高台の削り出しはやや浅い。瀬戸美濃系陶器と考えられる。Po.49は陶器の鉢口縁部である。釉薬の色調は淡緑灰色を呈し、胎土はやや緻密である。島根県の布志名焼系の製品か。Po.50とPo.51は、てづくねで成形された管状の土錘で、どちらも胎土は密で色調は淡い赤灰色を呈する。B.1は銅銭である。右下半部が欠損しており「元□□寶」の2文字のみ読み取れる。「元豊通寶」、「元祐通寶」、「元符通寶」の3種が候補となる。

第八節 遺構に伴わない遺物

出土遺物

遺構に伴わない遺物は、調査区の周囲に巡らした排水溝の掘削途中に出土したもので、出土した層位が明確でない遺物である。

Po.52はやや内彎気味に立ち上がる深鉢で、内外面ともきれいにナデ調整されているが、底部外面にはケズリの痕跡が残る。Po.53は縄紋土器の深鉢で、胎土に石英粒を多く含む。Po.54はやや小形の縄紋土器の深鉢で、復元口径は21.2cmである。Po.55は弥生土器の甕で内傾しながら拡張する口縁部に3条の凹線が巡る。Po.56は弥生土器の高坏脚柱部で、14条の凹線が施されている。内面にはシボリの痕跡が残る。Po.57は須恵器の坏身片で、やや軟質な焼成である。底部には糸切りの痕跡が残る。Po.58はやや軟質な瓦質の甕で、外面に格子目タタキの痕跡が残り、内面はハケ調整される。Po.59は口径9.6cmの土師皿で、てづくねによって成形されたものである。色調は白茶色を呈し、胎土は緻密である。



第18図 第2層・遺構外出土遺物図

第四章 自然科学分析

第一節 目久美遺跡出土木材の樹種同定 (株式会社 吉田生物研究所)

1. 試料

試料は、米子市目久美遺跡15次から出土した板材 (W.1) 1点と立木1点である。

2. 観察方法

剃刀で木口 (横断面)、柀目 (放射断面)、板目 (接線断面) の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡 (Nikon DS-Fi1) で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果 (針葉樹1種、広葉樹1種) の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヤナギ科ヤナギ属 (*Salix* sp.)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管 (~110 μ m) が単独または2~4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柀目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ~450 μ mであった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 鳥地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
鳥地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V」 京都大学木質科学研究所 (1999)
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)
深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)



木口

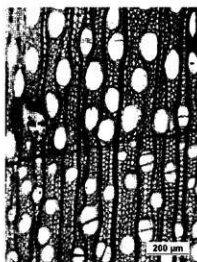
No-1 スギ科スギ属スギ



板目



板目



木口

No-2 ヤナギ科ヤナギ属



板目



板目

第五章 総括

第一節 縄紋時代の調査

今回の調査では、縄紋時代の海成層を完掘し、当時の海岸地形を確認した。これまでの調査により、この海岸地形は、縄紋時代前期の海進期に波浪が滞留して出来た波蝕台や波蝕崖に相当するものと見られる。この堆積層から出土した土器は、これまでの調査で縄紋時代前期前半の西川津式から認められ、途中減少傾向にある遺物もあるものの、北白川下層式から磯森式までの前期土器をほぼ網羅していることが判明している。今回の調査では、以前の調査よりも前期土器の出土量が少なく、むしろ後期土器の出土が目立ったが、これは当該期の遺物分布帯が、この調査区付近にあることを示唆するものと考えられる。これまでに行われた口久美遺跡の調査では、縄紋時代後期の遺構は第1次調査でドングリを貯蔵した土坑が確認されているのみだが、第15次調査地付近にも同様の遺構が存在するものと推測される。

第二節 弥生時代の調査

弥生時代の調査では、中期後半期の水田において畦畔を検出したが、隣接地で検出した畦畔と接続するものと考えられることから、これまでの調査で見つかっている水田と一連のものと理解される。水田の区画はやや狭くなるが、傾斜地になると狭くなる傾向があることから、本水田も、傾斜地に構築されたものであろう。

弥生時代後期の水路1は、幅6m、深さ1.5mの大規模なものであるが、同様の水路は1次、5次、6次調査でも確認されており、堆積する土砂の特徴から、全て一連の水路と考えられる。ここから復元される総延長は600mを超える規模のものとなり、弥生時代後期の水路遺構としては、全国的に見ても例の無い大規模なものとなる。この水路の構築は、弥生時代中期の水田が洪水により埋没した後に掘削されており、災害によって被災した生産域を復活させる意図があったものと考えられるが、この水路に伴う水田は過去の調査でも見つかっておらず、水路の掘削による効果がどれほどあったのかは不明である。また、この水路の堆積土は粗砂1層のみであり、掘削後、短期間に埋没したものと考えられることから、水路の掘削後にあまり時間をあけずに、再び洪水災害に遭ったものと推測される。なお、水路1が掘削された年代については、弥生時代後期初頭頃と想定している。その根拠としたのは、1次調査と6次調査で検出された中期後半期の水田を被覆する洪水堆積層を掘削していることと、今回出土した遺物では、最も新しいと見られるPo.29などから、弥生時代中期後半を遡らないものと考えたためである。

この水路の埋没した後の日久美遺跡は、弥生時代後期の土器の出土が少数見られるものの、古墳時代前期まで水田や水路の構築は見られず、この周辺一帯の低湿地は放棄されたままであったと推測される。一方、弥生時代後期の水田は、日久美遺跡とは丘陵を挟んだ東側に位置する池ノ内遺跡において確認されており、同一地点において古代まで連続と耕作されている。

以上の状況から、日久美遺跡の水田が弥生時代中期末から後期初頭に起こった洪水により被災したことによって、生産域の移動を余儀なくされた実態が明らかとなった。しかしながら、日久美遺跡の居住域はこれまでの調査でも確認されており、集落全体の移動を伴う現象だったのか、生産域の移動に止まっただけなのかについては不明であり、今後解明すべき課題である。

今回の出土遺物で特記されるものは、管玉未製品の出土があげられる。これまでの調査でも、玉砥石とされた溝状の窪みをもつ砥石が第1次、第12次調査で出土しており、今回の未製品の出土は、日久美遺跡での玉作の可能性を示すものと考えられる。しかしながら、玉作に伴って生じる剥片は出土しておらず、作業工程まで復元できる状況ではない。今後の調査において留意すべき点であろう。

第三節 まとめ

今回の調査では、日久美遺跡西側の弥生中期水田域の広がりや、弥生時代後期の水路を確認することができた。縄紋時代の遺物についても後期の段階の遺物分布状況が判明し、今後の調査の手がかりになるものと考えられる。

参考文献

- 小原貴樹ほか「日久美遺跡」米子市教育委員会 1986年
- 濱田竜彦ほか「日久美遺跡Ⅴ・Ⅵ」(財)米子市教育文化事業団 1998年

表1 目久美遺跡第15次調査出土土器・土製品観察表(復元値、反転・残存値は()で表示)

採回 番号	遺物 番号	地区・層位	種別・器種	法量(cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
10	Pa.1	9層	縄紋土器・深鉢	(15.5)		(5)	暗黒灰色	ナデ	ナデ	
10	Pa.2	8層	縄紋土器・深鉢	(26.5)		(7.2)	暗黒灰色	ナデ	ナデ	2条の沈線を施す
10	Pa.3	8層	縄紋土器・深鉢	(30.9)		(4.9)	暗茶褐色	風化	風化	頸部に1条の沈線が 巡る
10	Pa.4	8層	縄紋土器・深鉢	(30.3)		(12.8)	暗黒灰色	貝殻条痕	ナデ	
10	Pa.5	8層	縄紋土器・深鉢	(24.4)		(17.9)	灰茶色	貝殻条痕	条痕調整	
12	Pa.6	6層	弥生土器・壺	(20.3)		(5.8)	淡黒褐色	風化	風化	頸部に3条の凹線を施す
12	Pa.7	6層	弥生土器・壺	(17.4)		(2.1)	淡褐色	ナデ	ナデ	口縁端部を上方につ まみ上げる
12	Pa.8	6層	弥生土器・壺	(14.7)		(1.5)	淡茶色	ナデ	ナデ	口縁部に3条の凹線 紋を施す
12	Pa.9	6層	弥生土器・壺	(19.2)		(2.6)	白茶色	ナデ	ナデ	口縁部に5条の凹線 紋を施す
12	Pa.10	6層	突帯紋土器・ 深鉢			(3.3)	茶褐色	風化	風化	口縁端部からやや下 がった位置に突帯を 貼り付ける
17	Pa.11	水路1	縄紋土器・深鉢	(30.9)		(5.7)	黒褐色	風化	風化	
17	Pa.12	水路1	縄紋土器・深鉢			(9.1)	暗黒褐色	貝殻条痕	4段の刺突紋を施す	
17	Pa.13	水路1	縄紋土器・浅鉢	(20.4)		(3.3)	暗褐色	風化	条痕調整後ナデ	
17	Pa.14	水路1	突帯紋土器・ 深鉢			(5.2)	淡茶灰色	風化	風化	口縁端部に突帯を貼 り付ける
17	Pa.15	水路1	弥生土器・壺	(19.3)		(3.7)	淡茶灰色	風化	風化	頸部に1条の凹線が 巡る
17	Pa.16	水路1	弥生土器・壺	(16.4)		(4.6)	淡茶灰色	風化	風化	頸部に2条の凹 線が巡る
17	Pa.17	水路1	弥生土器・壺	(21.6)		(1.4)	淡灰褐色	風化	風化	口縁端部に刺突を施 す
17	Pa.18	水路1	弥生土器・壺	(15.7)		(0.9)	淡灰茶色	風化	風化	口縁端部に2条の凹 線と刺突を施す
17	Pa.19	水路1	弥生土器・壺	(20.3)		(1.5)	淡茶褐色	風化	風化	斜線紋
17	Pa.20	水路1	弥生土器・壺	(11.6)		(4.9)	淡灰茶色	風化	風化	指頭圧痕貼付突帯
17	Pa.21	水路1	弥生土器・壺	(11.1)		(4.8)	淡褐色	ナデ	ナデ	タテハケ後ナデ、口縁 端部に2条の凹線
17	Pa.22	水路1	弥生土器・壺			(3.9)	灰褐色	黒化	黒化	口縁端部と頸部に凹 線紋を施す
17	Pa.23	水路1	弥生土器・壺	(19.5)		(3)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	口縁部に5条の凹線 紋を施す
17	Pa.24	水路1	弥生土器・壺	(25.1)		(7.4)	茶褐色	ナデ	ナデ	ナデ調整、口縁端部 に刺突を施す
17	Pa.25	水路1	弥生土器・壺	(24.7)		(4.2)	淡茶灰色	風化	風化	
17	Pa.26	水路1	弥生土器・壺	(19.4)		(2.8)	淡茶灰色	風化	風化	
17	Pa.27	水路1	弥生土器・壺	(15.4)		(7.4)	淡茶褐色	ナデ	ナデ	頸部に凹線と刺突を 施す
17	Pa.28	水路1	弥生土器・壺	(17.2)		(4.4)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	口縁部に斜線紋を施 し、ボタン状突起、頸 部に指頭圧痕貼付突 帯を巡らす
17	Pa.29	水路1	弥生土器・壺	(16.7)		(1.7)	灰茶色	ナデ	ナデ	口縁部に3条の凹線 紋を施す
17	Pa.30	水路1	弥生土器・底部	(21.7)		(2.6)	淡灰茶色	ナデ	ナデ	風化
17	Pa.31	水路1	弥生土器・高坏			(10.7)	暗灰褐色	紋り痕	紋り痕	風化、脚部に凹線紋 を施す
17	Pa.32	水路1	土器片転用 紡錘車	(3.8)	(3.9)	(0.5)	暗褐色	ハケ	ハケ	

表2 目久美遺跡第15次調査出土土器観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

挿入番号	遺物番号	地区・層位	種別・器種	法量 (cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
17	Po.33	水路1	転用筋線車未製品	(4.6)	(4.2)	(0.7)	淡茶灰色	風化	風化	
17	Po.34	水路1	土鏝	3.7	4.0	4.0	淡茶灰色		手づくね	
17	Po.35	水路1	土鏝	4	(3.4)		淡黒色		手づくね	
17	Po.36	水路1	弥生土器・底部	(8.6)	(3.7)		淡灰色	風化	ハケ	
17	Po.37	水路1	弥生土器・底部	(5.3)	(2.9)		淡赤褐色	風化	タテ方向のミガキ	内面黒化
17	Po.38	水路1	弥生土器・底部	(5.3)	(4.1)		淡灰褐色	煤付着	タテ方向のミガキ	
17	Po.39	水路1	弥生土器・底部	(7.6)	(4.9)		茶灰色	風化	風化	
17	Po.40	水路1	弥生土器・底部	(5.1)	(3.9)		灰茶色	風化	風化	
17	Po.41	水路1	弥生土器・底部	(7.3)	(2.9)		淡黒灰色	風化	風化	
17	Po.42	水路1	弥生土器・底部	(9.3)	(2.4)		淡茶灰色	風化	風化	
17	Po.43	水路1	弥生土器・底部	(8.9)	(1.3)		淡黒灰色	風化	風化	
18	Po.44	2層	弥生土器・壺	(26.7)		(4.6)	淡茶灰色	風化	口縁部に3条の凹線紋を施す	
18	Po.45	2層	須恵器甕・壺			(3.6)	青灰色	ナデ	波状紋	
18	Po.46	1層	陶器・碗	(11.2)		(3.8)	暗灰色		貫入あり	肥前産陶胎没付
18	Po.47	2層	陶器・皿	(10.7)		(2.3)	淡茶色	緑色釉	ナデ	肥前産
18	Po.48	2層	陶器・皿		(5.7)	(3.5)	灰色	緑色釉	底部露胎	瀬戸美濃系
18	Po.49	1層	陶器・鉢	(18.6)		(3.1)	淡緑灰色			在地産
18	Po.50	2層	土鏝	2.7	1		淡赤灰色		手づくね	
18	Po.51	2層	土鏝	(2.4)	0.9		淡赤灰色		手づくね	
18	Po.52	遺構外	縄紋土器・深鉢	(42.2)		(24.3)	暗黒灰色	貝殻条痕	ミガキ	
18	Po.53	遺構外	縄紋土器・深鉢	(36.8)		(6.1)	暗黒茶色	貝殻条痕	ケズリ	
18	Po.54	遺構外	縄紋土器・深鉢	(21.2)		(5.3)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
18	Po.55	遺構外	弥生土器・壺	(17)		(2.5)	淡灰茶色	ナデ	口縁部に3条の凹線紋を施す	
18	Po.56	遺構外	弥生土器・高坏			(11.8)	淡灰茶色	絞り痕	脚部に14条の凹線が走る	
18	Po.57	遺構外	須恵器・坏	(6.4)		(2.4)	淡白灰色	ナデ	ナデ、底部は糸切り	
18	Po.58	遺構外	須恵器・甕			(4.8)	淡灰色	風化	格子目タタキ	産地不明
18	Po.59	遺構外	土師器・皿	(9.6)		(2.3)	白茶色	ナデ	ナデ	

表3 目久美遺跡第15次調査出土土製品観察表

挿入番号	遺物番号	地区・層位	種別	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
15	S.1	4層	管玉未製品	1.5	1.2	1.1	2.3	碧玉製

表4 目久美遺跡第15次調査出土木製品観察表

挿入番号	遺物番号	地区・層位	種別	法量 (cm)			樹種
				最大長	最大幅	最大厚	
12	W.1	6層	板材	5.7	11.1	0.7	スギ科スギ属スギ

表5 目久美遺跡第15次調査出土金属製品観察表

挿入番号	遺物番号	地区・層位	種別	法量 (cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
18	B.1	2層	銅銭	(2)	(2.3)	(0.1)	「元口口寶」

写 真 图 版

1.調査前風景 (西より)



2.表土掘削状況 (南より)



3.表土掘削状況 (南より)





1. 縄紋層完掘 (西より)



2. 縄紋層完掘 (北より)



3. 土坑1 (北より)

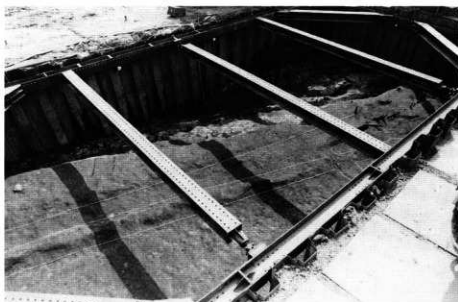
1. 弥生水田（西より）



2. 弥生水田（北より）



3. 弥生水田（北より）





1. 水路1 (東より)



2. 水路1 (北より)



3. 水路1 (西より)

1. 水路1 (西より)



2. 杭列 (東より)





1. 水路1断面B (西より)



2. 水路1断面A (西より)



3. 水路1断面A (西より)

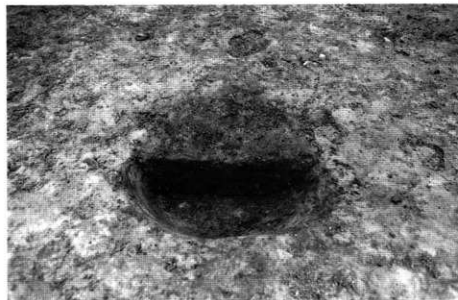
1. 水路1検出 (東より)

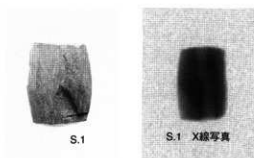
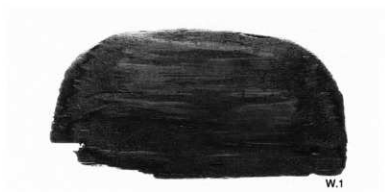
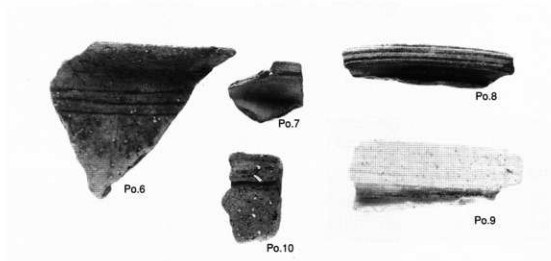
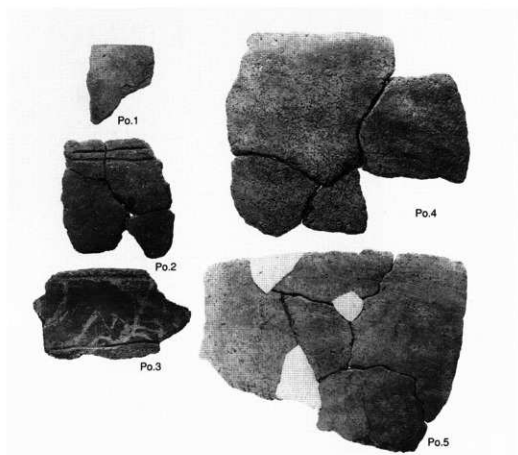


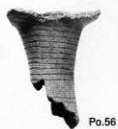
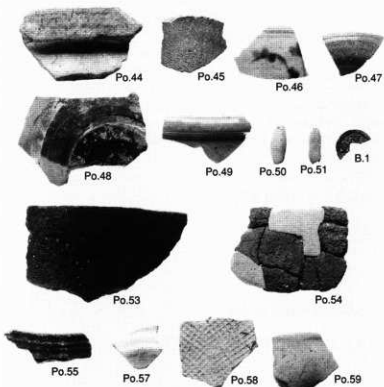
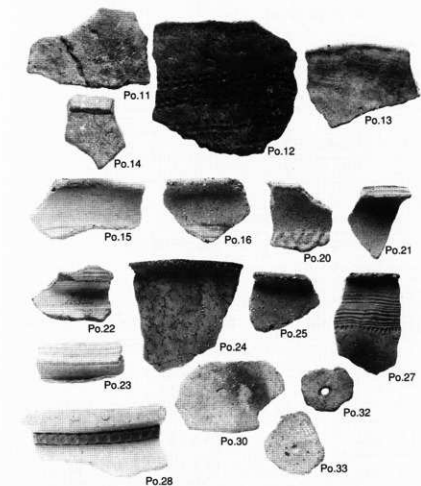
2. 土坑3検出 (東より)



3. 土坑3断面 (南より)







報告書抄録

ふりがな	めぐみいせき (だい15じちょうき)							
書名	目久美遺跡 (第15次調査)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	60							
編著者名	佐伯純也							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935番地1		TEL・FAX 0859-22-7209					
	eメールアドレス		maibun@sanmedia.or.jp					
発行年月日	西暦 2009年 3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
目久美遺跡	鳥取県米子市 目久美町	31202	2-13	35° 24′ 57″	133° 20′ 26″	平成20年 2月5日～ 平成21年 3月31日	200m ²	道路建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
目久美遺跡 15次調査	生産遺跡 散布地	縄紋時代	土坑		縄紋土器			
		弥生時代	水田、畦畔、水路、土坑		弥生土器、木製品 土鍾、菅玉			
		古墳時代			須恵器			
		中世			陶磁器、銅銭			
		近世			陶磁器、土鍾			
要 約								
<p>目久美遺跡は、米子市目久美町に所在する縄紋時代前期から近世の生産・集落遺跡である。今回実施した第15次調査では、弥生時代後期に掘削された水路と、弥生時代中期の水田を検出した。また、碧玉製菅玉の未製品1点が出土した。縄紋時代では、海進期に形成された海岸地形を検出し、土坑状の遺構2基を確認した。</p>								

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書60

目久美遺跡

2009年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1

TEL 0859-22-7209

印刷 (有)米子プリント社